（様式５）

<table>
<tr><td colspan="4">令和５年度　高岡支援学校アクションプラン　－１－</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="3">学習活動(研修)</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="3">児童生徒一人一人の学びを深める授業改善</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="3">昨年度より、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を行うことで、一人一人の学びが深まる指導・支援の在り方を検討してきている。児童生徒の発言や行動を事実として捉え、その背景にある「思い」を複数の教員で解釈し、話し合ったことを基に学習内容や指導方法の見直しを行うことで授業改善を図ってきた。昨年度は各学部共に、集団の授業で、育成を目指す資質・能力の三つの柱で単元の目標を立て、授業づくり、学習評価、授業改善を行った。各学部の研修実践から、教員一人一人が児童生徒の学びの姿に注目し、単元を通して、目標・評価を意識しながら授業を実践し、授業改善を行うことができるようになってきた。今年度は昨年度の成果を生かしつつ、さらに一人一人の学びが深まるよう、児童生徒の評価規準を明確にした上で、授業づくり、授業改善を行っていく。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td colspan="3">評価規準を明確にした授業づくりについての研修会や情報提供</td></tr>
<tr><td colspan="3">年間５回以上</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="3">・外部講師による研修会や校内研修会の実施、資料や刊行物の紹介等の情報提供を行う。
・授業づくりに関する資料等をパソコンやタブレット端末でいつでも確認できるように、校内共有フォルダやクラウド（Googleの共有ドライブ）に載せる。
・集団で行う授業の中から、各学部一つの教科等を取り上げ、単元を通して、児童生徒の評価規準を共通理解した上で授業づくりを行い、児童生徒の学びの姿から評価規準や学習内容を見直すことで授業改善を行っていく。</td></tr>
<tr><td>達成度</td><td>年間６回実施</td><td colspan="2">・外部講師による研修会（１回）
・授業づくりに関する情報提供（１回）
・評価規準についての書籍紹介（１回）
・学年、グループ研修の共有（３回）</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="3">・外部講師による研修会を実施した。講義のビデオ撮影を行い、当日不在だった教員は後から聴講できるようにした。
・研修会資料の要点を校内共有フォルダに掲載することで授業づくりに関する情報提供を行った。さらに資料を各学部に配付し、学年等の研修で活用してもらった。
・校内書架にある教師用図書から、評価規準について示された事例を拾い上げ、校内共有フォルダに掲載し、紹介することで情報提供を行った。
・学部別研修を年間３回以上行い、各学年や各グループ研修の実践を共有するようにした。
・学部別研修を進めるに当たり、他学部の前年度の取組を参考にしたり、他校の研究の情報を収集したりした。</td></tr>
<tr><td>評　価</td><td>A</td><td colspan="2">研修会や文献の事例から情報を得ることで、評価規準についての理解が深まった。児童生徒の評価規準を明確にすることで、児童生徒の学びが深まる授業づくり、授業改善ができた。</td></tr>
<tr><td>学校関係者の意見</td><td colspan="3">・研修会のポイントを共有したことは教員に幅広く理解を促す点で評価できる。
・授業参観の折に、授業で取り組んでいる重点的な目標を提示して参観してもらうと子供の学ぶ姿が保護者により伝わるのではないか。
・学び合い、教え合う同僚性の中で、授業に関わる教員が子供の姿を基に共通に見ていくことがよりよい授業につながる。校内共有フォルダやクラウドを活用し、効率的に学び合ってほしい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課　　題</td><td colspan="3">・共に学び合い、教え合う同僚性の形成につながる校内研修の在り方を検討するとともに、校内共有フォルダやクラウドを活用した情報共有の仕方を工夫し、効率的に授業づくりの考え方や子供の姿の捉え方を学び合っていく。
・授業で見られた子供一人一人の深い学びの姿を発信し、家庭とも共有していく。</td></tr>
</table>

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

<table>
<tr><td colspan="3">令和５年度　高岡支援学校アクションプラン　－２－</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="2">学校生活（寄宿舎）</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="2">一人一人に応じた自立を目指し、生活支援の充実を図る。</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">・新型コロナウイルス感染症により、今年度１学期まで舎生一人が一週間に泊まる舎泊回数を制限しているため、寄宿舎で生活支援が継続して行うことが難しくなっている。
・学校における指導、家庭での取り組み、寄宿舎における支援がうまく連携、統一が図りづらく、実生活に向けて般化の取り組みができていない。
・日々舎生の担当指導員が代わるため、同じ支援を行うことが難しい。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td colspan="2">舎泊回数週２泊以上の舎生のうち、家庭と連携し生活支援に取り組んだ割合</td></tr>
<tr><td colspan="2">６０％以上</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・学部、家庭と情報共有を図りながら、個々の課題や支援内容を設定する。学校、寄宿舎、家庭での支援方法を可能な限り統一し、個々の実践の様子を情報共有する。
・「寄宿舎生活の記録」を活用し、指導員間で情報共有を図り、担当者が代わっても同じ支援が行えるようにする。
・舎生に記録用紙を配付し、家庭での取り組み状況を記録させることで意識を高める。
・外部より講師を招き、知的障害のある生徒の卒業後の生活を見据えた支援についての研修会を行う。</td></tr>
<tr><td>達成度</td><td>１００％</td><td>・ 全ての家庭の協力のもと、連携して生活支援に取り組むことができた。</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">・保護者との情報共有は、入舎希望調査書の入舎理由記載欄や荷物搬入時の保護者面談、連絡帳を通じて実施した。学級担任との情報共有は連絡会や連絡帳、緊急性の高い場合は口頭で実施した。支援方法の統一については、寄宿舎で活用しているツールを家庭に持たせ、実践した。
・指導員間の情報共有では、個人記録「寄宿舎生活の記録」の他に引継ぎ記録である「指導日誌」の様式を変更して活用した。
・家庭でがんばる目標や、目標に向けた取り組み状況を記入する欄、本人や保護者の感想を記入する欄を設けた記録用紙を作成、活用した。記載方法は個々に応じてモチベーションを挙げるためにシールを貼ったり、絵を描いたりできるようにした。
・８月に社会福祉法人手をつなぐ高岡所長浅野高子氏による研修会を「知的障害のある生徒の卒業後の生活を見据えた支援」と題し、実施した。</td></tr>
<tr><td>評　価</td><td>A</td><td>寄宿舎で行っていることを家庭で実践することで自信をつけ、自分のできること（基本的生活習慣・生活スキル）を家庭で実践していこうという気持ちが芽生えた。</td></tr>
<tr><td>学校関係者の意見</td><td colspan="2">子供のできる、できないがクローズアップされやすいが、子供がなりたい自分から将来をイメージすることや得意なことを生かしていくという視点をもち、子供が自分の気持ちを発信できるような取組になるよう支援していくとよい。
生活レベルの向上や社会的スキルの習得については、卒業後を見据え、広い視点で保護者と相談し、支援内容を決定するとよい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課　　題</td><td colspan="2">保護者のニーズや舎生の卒業後の将来像等の情報共有を早期に実施し、目標の設定時期を早めることで支援期間を確保する。
今年度作成した指導日誌やチェックリストを効果的に活用し、生活指導から家庭への般化までを充実させる。</td></tr>
</table>

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

<table>
<tr><th colspan="4">令和５年度　高岡支援学校アクションプラン　－３－</th></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="3">進路支援（進路指導）</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="3">高等部の生徒が自己理解を進め、主体的に進路を選択する力を育てる進路指導の充実</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="3">今まで、高等部の生徒の就業体験先や進路先を決める際に、生徒自身の希望を聞き取ったり、生徒の相談に応じたりすることがほとんどなく、保護者の希望に依るところが大きかった。また、自分の適性や卒業後の進路について具体的に考えることが難しい生徒、社会経験や情報の不足から卒業後の生活をイメージすることが難しい生徒が多く、キャリア教育の視点で計画的に進路学習を進める必要がある。
そこで、進路に関する体験的な学習を取り入れ、その事前学習や事後の振り返りの学習を通して生徒が卒業後の進路や生活について考える機会としたい。さらに、個別の進路面談を実施し、生徒が自己理解を進め、自分の適性に合う進路先を主体的に選択できるよう支援していきたいと考える。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td colspan="2">①体験的な進路学習の実施</td><td>②進路面談の実施</td></tr>
<tr><td colspan="2">年間５回以上</td><td>年間２回以上</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・卒業生が働く職場見学や先輩に学ぶ進路学習の機会を設けたり、社会人講師から職業生活に係る技能を習得する実技講習会を実施したりする。
・生徒が様々な進路先を知り視野を広げるために、多様な就業体験先を確保する。
・生徒が卒業後の進路や生活について具体的に考えることができるよう、「就業体験のしおり」やワークシートを活用して計画的に事前事後学習を進める。</td><td>・就業体験後に生徒と個別の進路面談を実施し、就業体験日誌の体験先からのコメントや評価表を基に成果と課題を確認し、生徒の自己理解を促す。
・仕事内容や体験先の環境等を整理して自分に合う進路先を選ぶよう促す。</td></tr>
<tr><td>達成度</td><td colspan="2">＜体験的な進路学習＞　年間５回実施</td><td>＜進路面談＞　年間２回実施</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">・１年生を対象に、地域の障害福祉サービス事業所を見学する校外学習を実施した。作業体験も取り入れた。
・全学年を対象に、先輩に学ぶ進路学習会を実施した。卒業生２名と職場の方を招き、通勤方法、給料の使い道、ストレス解消法や働くために大切なこと等について話を聞いた。
・全学年を対象に、外部講師を招いた清掃実技講習会を実施し、台拭きの仕方や自在ほうきの使い方について実技指導を受けた。
・２、３年生を対象に、就業体験を２回実施した。２年生では、進路選択の幅が広がるように多様な体験先を確保し、年間を通して一人当たり２～４か所の事業所で体験した。３年生では、進路決定と地域生活への円滑な移行を目指し、十分な体験日数を確保した。実施に当たっては「就業体験のしおり」を活用し事前事後学習を進めた。</td><td>・２回の就業体験終了後に,言葉やイラスト等で意思を確認できる生徒全員と担任が個別の進路面談を実施した。就業体験日誌の体験先からのコメントを丁寧に読み込んで、褒められたこととアドバイスを受けたことを整理してまとめたり、評価表を基に課題を確認し、今後の目標設定をしたりした。
・進路選択の際には、仕事内容や体験先の環境、指導員の関わり方等の観点から、選んだ理由を自分の言葉で表現できるよう支援した。</td></tr>
<tr><td>評　価</td><td>A</td><td colspan="2">・１年生の生徒は、先輩に学ぶ進路学習会で先輩が働く様子を動画で見たり、校外学習で事業所見学や作業体験をしたりしたことで、卒業後の働く生活や実際の仕事をイメージすることができた。
・２年生の生徒は、就業体験や進路面談を通して進路を自分のこととして捉え、ほとんどの生徒が「～だから～で働きたい」と意思表示できた。
・３年生の生徒は、就業体験の事前事後学習や個別面談を通して、自分の課題を自覚し、学校生活で意識的に取り組む生徒が増えた。</td></tr>
<tr><td>学校関係者の意見</td><td colspan="3">生徒の気持ちを大切にした取組や進路指導は評価できる。本人の希望と保護者の願いが一致しないときは、本人の思いに寄り添えるように話し合いを重ねていくとよい。企業就労を目指す場合はハローワークと、障害福祉サービス事業所の利用を考える場合は市福祉課と連携して進路指導を進めるとよい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課　題</td><td colspan="3">本人の主体性を大切にしながら、早い段階で保護者のニーズや家庭の状況を十分把握して進路指導を進めていく必要がある。また、進路に関する情報を保護者にどう伝えていくか、教員がいかに障害者福祉の基礎知識を身に付け、キャリア教育に関する理解を深めていくかも課題である。</td></tr>
</table>

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）